

まえがき

本書の書名にある「マタンギ・パシフィカ」はトンガ語で「太平洋を渡る風」を意味する。太平洋のこの海域では、風（マタンギ）は変化を先触れし、変化をもたらすものの象徴となっている。

18世紀末のキャプテン・クックによる探検航海以来、オセアニアの島々は次々と打ち寄せる白人近代文明の大波の下に深甚な絶えざる変動を蒙ってきたが、1960年代から70年代を通じて与えられた独立により2世紀近く続いた近代文明の波は退潮に転じた。それまで続いていた白人による統御の緩みは島々に歴史的エアポケットの状態をもたらした。その空白のなかにさまざまな対立や矛盾が噴き出してくるのが1980年代である。そこにおける変動は過去200年間のそれとは異なり、白人の存在が消え去りつつあるがゆえに生じてきたものであり、太平洋の島々の本当の意味での文明史はこれから始まろうとしているのである。われわれがマタンギ・パシフィカ（太平洋を渡る変動の風）というタイトルを選んだのは、そうした文明史的転換点としての現在を象徴するためであった。

本書は、1991年から2年間かけて行われたアジア経済研究所共同研究プロジェクト「オセアニア島嶼諸国の政治・社会変動」の成果である。このプロジェクトが当初目指したところは、日本にとってとすれば「見えざる隣人」となりがちな太平洋の島々について、観光ガイドブックに出てくるようなステレオタイプ化された虚像ではなく、島々の人々が生身の人間として直面している現実にも少しは肉薄し、それを紹介することにあつた。研究参加者はいずれも豊富な現地生活の経験を持ち、そのなかから、彼らが見た現地の人間にとっての切実な問題を汲み上げ、それを社会的な、また歴史的な背景の前に置いて立体的に提示しようと試みた。トンガにおけるモルモン教、フィジーにおけるスポーツなど思いもかけない研究テーマが浮かび上がってきた

のはその結果である。トンガ王国とモルモン教！この一見、奇異な組み合わせが19世紀以降の世界史的背景のもとに置かれるとき、奇妙な遠近法の反転を生じ、逆に世界史の見えざる相貌を照射する輝きを放ち出すと言えば編者の身びいきにすぎないだろうか。

左様、太平洋の島々の住人たちが生きている現在を理解しようと試みる思索と経験の細道をたどったわれわれは、近代世界史における太平洋という巨大な歴史的舞台に遭遇したのであった。トンガ、フィジー、ミクロネシア、ニューカレドニア、パプアニューギニアといった太平洋上のジグソーパズルの一片一片のみを注視している時には見えてこなかった太平洋の全体像が突如、われわれの眼前に現れたのである。それはわれわれにとって知的「地理上の大発見」とも呼ぶべき経験であった。われわれのこの驚きと感動の幾ばくかをでも、本書を通じて伝え得たなら、本書の目的はほぼ達せられたといえよう。何とぞ、われわれの拙ない筆の背後に横たわる豊饒な世界の広がりを読みとってくださらんことを！

とまれ、本書はアジア経済研究所におけるオセアニア島嶼地域に関する初めての論集である。それを出発点に、今後、より一層の研鑽を積んでゆきたいと考えている。

最後に、この場を借りて、本研究会の資料面をサポートし、常にわれわれを勇気づけてくださった立山愛子さんに心からなる感謝の意を捧げたい。

1994年7月

編者